九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

多言語社会の文化戦略 : 西アフリカの小国セネガルの言語風景

砂野, 幸稔
熊本県立大学

https://doi.org/10.15017/2320123

出版情報：九州人類学会報. 25, pp.17-30, 1998-03-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

多言語社会の文化戦略　…西アフリカの小国セネガルの言語風景

熊本県立大学　　砂　野　幸　稔

0．はじめに—問題意識

セネガルの作家センベーヌ・ウスマンは小説『郵便為替』のなかで、公用語のフランス語をまったく話せない老人が、フランスに暮らす甥から送られてきた郵便為替を現金化しようとして出会うさまざまな障壁、フランス語を操る者たちの冷酷さと搾取を描き、セネガル社会の「公式の」場から排除された庶民の絶望と怒りを伝えようとした[1]。この小説の提起する問題を言語の問題として見ると、そこから読みとることができるのは、植民地支配者によって生みだされた植民地エリートが「独立」によって「国家」を引き継いで以来、彼ら一握りのエリート以外には理解されない植民地支配者の言語を「国家」の言語としてきたこと、そして、その「国家」の枠組みのなかで成立している現代社会に参加するためにも、それから自らを守るためにも欠かすことのできない文字言語の所有から、いまだに大多数の人々が排除されていることの問題である。

ラジオ、テレビなどの音声、映像メディア、あるいは電話などの通信手段がどれだけ発達し普及したとしても、それは現代の世界が文字言語を基盤として成り立っているという事情を根底から変えるものとはなっていない。

センベーヌの取る立場は外国語であるフランス語にセネガルの言語であるウォロフ語を対置する言語ナショナリズムの立場である。外国資本に寄生するセネガル人ブルジョワジーの「不能」ぶりを象徴的に描く小説『ハラ（不能)』のなかで、センベーヌは主人公の娘にこの立場を明確に表明させている。

「お前はウォロフ語で書くのかい」
「ええ、雑誌を出しているのよ。『カッドゥ』というの。習いたい人には書き方も教えているわ」
「お前はこの言葉が国の言葉になると思っているのか」
「85パーセントの人が使ってるわ。あとは書くことを覚えるだけよ」
「フランス語はどうなるんだ」
「歴史の一幕にすぎないわ。ウォロフ語が私たちの国語よ」[2]

こうした対ヨーロッパ語言語ナショナリズムをさらに徹底した形で表明したのはケニア人作家グギ・ワ・ジオンゴである。すでに英語作家として世界的に知られていたグギは、ケニアの新植民地状況を厳しく批判する立場の故に投獄されたが、出獄後ケニアの文化的従属を批判して自ら英語での著作との訣別を宣言し、以後自らの母語であるギクユ語で著作を行うことを選択した。この選択はケニヤにおける彼の立場をさらに困難なものとし現在は亡命状態を余儀なくされているが、そのなかでもギクユ語の雑誌を発行し続けるなど彼の姿勢は変わっていない[3]。

しかし、対ヨーロッパ語言語ナショナリズムという点では一見まったく同じ立場をとるかのように

見えるグギとセンベーヌの立場には、実は重要な相違がある。

センベーヌが示唆するのはいわば「国民語」のイデオロギーとでも言うべきものである。『ハラ』からの引用のなかでも言われているように、セネガルではウォロフ語が事実上の共通語となっている。そのことに基づいて、ウォロフ語をフランス語に代わる、あるいはフランス語とならぶ「国家語」として採択し、「国民」全体の言語として優先的な地位を与えるべきだとするのである。それは、フランスにおけるフランス語の場合に典型的に見られるような、近代ヨーロッパ型国民国家の「国民語」「国家語」のイデオロギーを参照する立場であり、フルフルデ、セレール、マンディンカなどウォロフ語以外の言語には副次的な位置しか与えないことが暗黙の前提となっている。

それに対してグギの立場には「母語主義」への強い傾斜が明確にある。ケニヤでは、セネガルの場合とは違い、英語とともにスワヒリ語が公用語の地位を持ち、スワヒリ語は初等教育からの教育言語としても用いられている。グギがその復権を唱えるギクユ語はケニアの最大民族集団であるギクユ人の言語だが、ウォロフ語やスワヒリ語のような共通語的性格を持つ言語ではない。しかし、英語に比べ副次的な地位しか持たないとはいえ「国家語」の地位を与えられているスワヒリ語は、大部分のケニア人にとっては第二言語であり、グギにとってもスワヒリ語は「自らの言語」ではないのである。グギはスワヒリ語を否定するわけではないが、グギの場合は対ヨーロッパ語言語ナショナリズムだけではなく、自らの「母語」に文字言語としての地位を与えることが問題なのである。この立場を敷衍すればルオ、カンバ、ルヒヤなどの他の言語についても同じことが言えるはずであり、グギはそのように主張するが、ギクユ人がケニアでもっとも強い勢力を持つ民族集団であることから、他の民族集団からは排他的ギクユナショナリズムとしての性格を警戒されるという問題がある。

アフリカの多言語社会における言語問題への私の関心は、アフリカ人作家のこうした言語ナショナリズムと触れることから始まった。そして、ヨーロッパ文化に完全に従属し、大多数の人々が文字文化から排除されている状況は克服されるべきであり、必ず克服されるであろうという彼らの信念には共感しながらも、彼らの取るイデオロギー的な立場としての言語ナショナリズムとは距離を置き、アフリカの人々の文字文化獲得への努力を追いながら、アフリカの多言語社会においてどのような文字文化が成立し得るのかを考えてみたい、というのが私の問題意識である。

言うまでもなく、五億の人口を持つ多様なアフリカ大陸を一括して扱うことなど不可能である。私はひとつのケーススタディとして西アフリカの小国セネガルを調査地として選び、現在セネガルの言語状況と文字文化の発展の現状を調査している。本稿は、その中間報告としての性格を持つ。本稿では、まずセネガルの言語状況を概観した後、セネガルの言語ナショナリストたちの動きとセネガル政府の言語政策の変遷を辿り、セネガルの諸言語の文字文化がどのような方向で形作られつつあるか、その大まかな見取り図を作成してみたい。

1．セネガルの言語状況

(1)唯一の公用語フランス語

アフリカ大陸においてもっとも古いフランスの植民地であったセネガルは、1960年にフランスから独立を獲得した。他のすべての旧フランス領アフリカ諸国と同様、セネガルは旧植民地宗主国の言語であったフランス語を唯一の公用語とした。初代大統領のL. S. サンゴールをはじめとするフランス

〈表1〉フランス語の普及率（1964年）

まったく理解しない者	男	79.1％	女	98.0％	全体	88.9％
読み書き可能な者	男	11.0％	女	1.3％	全体	6.0％

（出典：1964年全国調査〈セネガル政府統計局〉）

語エリートがフランスによって生みだされていたとは言え、独立時にはフランス語を理解する者は一握りのエリートに限られていた。1964年に行われた全国調査の結果がそれを明確に示している（表1参照）。

この調査の結果をそのまま信じたとしても、人口のほぼ90％が公用語のフランス語を全く理解せず、読み書き可能な者はわずか6％に過ぎない。しかも、この調査はおそらく本人の申告に基づく調査であり、実際にフランス語を不自由なく使いこなす者の割合は、これをはるかに下回るものであったと考えるのが妥当であろう。

独立後、セネガル政府はフランス政府の強力な後押しを受けて、フランス語教育の普及のための努力を展開し、初等教育の就学率は当初10年間ほどは急速に上昇したが、約50％に達したところで頭打ちとなり、現在にいたっている。その結果、公用語であるフランス語の識字率も88年の政府調査で約25％と非常に低い水準にとどまっている（表2参照）。ここでも調査結果は自己申告にもとづく

〈表2〉識字率（1988年）

◇6歳以上識字率	31.57％
うち、フランス語識字者	25.6％
アラビア文字による識字者	4.4％
ローマ字によるアフリカ諸言語識字者	0.2％

（出典：1988年国勢調査〈セネガル政府統計局〉）

ものであり、実際にフランス語の読み書きを不自由なく行える者の割合はさらに低いものと思われる。

(2)出自と言語

それではセネガル人の実際の言語生活はどのような言語によって行われているのか。

米国に本拠を持ち、セネガルに研究所を置く国際言語学協会（SIL:Société Internationale de Linguistique）がリストアップするセネガルの言語数はフランス語を含めて39言語だが[4]、これはフルフルデ語、ジョラ語、セレール語などの方言も独立言語として区別した結果である。方言か独立言語かを区別する基準は曖昧であり、正確な言語数を確定するのは事実上不可能だが、30前後の異なった言語が存在していることだけは確実である。

表3、表4にセネガルの国勢調査に基づく主要なエスニック・グループの人口と各言語の第一、第二言語としての話者数をあげた。

エスニック・グループとしてはウォロフが最大グループであり、フルベ、セレールがそれに続く大

〈表3〉エスニック・グループ

ウォロフ	2,960,540人（43.7％）	マンディンカ	312,580人（4.6％）
フルベ	1,572,510人（23.2％）	その他（東部地域）	234,980人（3.5％）
セレール	1,000,650人（14.8％）	その他（外国人）	315,160人（4.7％）
ジョラ	373,960人（5.5％）		

（出典：1988年国勢調査〈セネガル政府統計局〉）

〈表4〉第一言語あるいは第二言語としての話者

ウォロフ	4,801,080人（70.9％）	マンディンカ	420,880人（6.2％）
フルフルデ	1,634,570人（24.1％）	ジョラ	384,800人（5.7％）
セレール	929,360人（13.7％）	ソニンケ(サラコレ)	93,070人（1.4％）

（出典：1988年国勢調査〈セネガル政府統計局〉）

グループとなっている。出自については父系で受け継がれるが、都市部においては異なったグループ間の通婚がしばしば見られ、相対的にやや閉鎖的なフルベ人を除いて帰属意識はあまり強固ではない。とくにセレール人については都市部においてセレール語を失いウォロフ化する傾向が顕著である。表4に見られるように、セレール語の話者数は、第一言語としての話者と第二言語としての話者を合わせても、エスニック・グループとしての人口を大きく下回っているのである。

表4は、1971年にセネガル政府が「国語（Langues nationales)」として指定した六つの主要言語の第一言語あるいは第二言語としての話者数をあげたものだが、フルフルデ語、マンディンカ語、ジョラ語がそれぞれ地域共通語としての性格を持つためにエスニック・グループの人口を超える話者数を持つとともに、ウォロフ語が事実上セネガル全域をおおう共通語としての性格を持っていることがわかる。さらに、少数言語の話者の場合、三言語、四言語を用いる複数言語使用が少なくなく、第三言語、第四言語としての話者数まで含めると、ウォロフ語の話者数は80％を大きく超えるものと考えられる。

(3)「ウォロフ化」の進行

すでに事実上の共通語となっているウォロフ語は、全人口の50％の第一言語となっているだけでなく、その拡大傾向はとくに都市部において顕著である。表5は1986年にダカール大学応用言語学研究所のマルティーヌ・ドレフュスが行った調査の結果だが、世代を経るごとにウォロフ語を第一言語とする者の数が増加し、他言語の話者数が減少していく傾向が明確に読みとれる。ダカールにおいては約400名の被調査児童のうち60名が、そして本来ウォロフ語地域ではなかったジガンショールにおいても700名余りの児童のうち50名近くが、新たにウォロフ語を第一言語として獲得し、主要言語であるジョラ語は逆に第一言語話者数を減らしている。

2.「国語」ナショナリストたち

こうしたウォロフ化の進行とともにセネガルの言語文化状況を特徴づけるもうひとつの重要な要素

〈表5〉「ウォロフ化」の進行

※1986年、Martine Dreyfus（CLAD）による調査

（出典：Réalité Africaine et Langue Française, No. 21, CLAD, 1987）

①ダカールおよび周辺

◎小学校児童およびその父母の第一言語

＋＋ウォロフ	母	208名	父	213名	→子	273名
－　フルフルデ	母	98名	父	103名	→子	77名
－－セレール	母	59名	父	56名	→子	32名
－－ジョラ	母	25名	父	19名	→子	15名
＝　マンディンカ	母	7名	父	7名	→子	7名

②ジガンショール

◎小学校児童およびその父母の第一言語

－　ジョラ	母	300名	父	284名	→子	254名
＋＋ウォロフ	母	117名	父	98名	→子	175名
＋　マンディンカ	母	78名	父	94名	→子	101名
＋　マンカニュ	母	75名	父	75名	→子	80名
－　フルフルデ	母	86名	父	85名	→子	67名
－　セレール	母	21名	父	36名	→子	24名
＋　クレオル	母	18名	父	10名	→子	20名

は、植民地期以来の「国語」ナショナリズムの伝統である。

その先駆的存在であり、セネガルのフランス語知識人に大きな影響を与えたのがエジプト学者のシェク・アンタ・ディオップだった。シェク・アンタ・ディオップは、1954年にプレザンス・アフリケーヌ社から出版された『黒人諸民族と文化』[5]において、古代エジプト文明の黒人起源を論じ、アフリカ大陸の歴史をその起源から復権しようとするとともに、植民地支配によって発展を阻まれてきたアフリカ社会を現代文明の中で再建していくためには、外国語にすぎない英語やフランス語ではなく、アフリカ人自身の言語を現代文明に適応しえる言語として発展させていくことが不可欠であると強く主張した。アフリカ諸語は非論理的言語で近代文明の受容には適さないという神話が黒人知識人の間でさえ「常識」であったその当時、ディオップの主張は、エジプト文明の黒人起源説と同様荒唐無稽なものと看做されるものであった。しかし彼は、アフリカ諸語が西欧文明の蓄積を我がものとすることは不可能だという神話を実証的に否定して見せた。古代エジプト語と現代アフリカ諸言語の類縁性を主張する[6]ディオップは、現代ヨーロッパ諸言語がラテン語、古代ギリシア語を用いて科学技術用語をはじめとする現代文明の諸術語を作り出したように、現代アフリカ諸語も古代エジプト語を用いて現代文明の諸術語を生み出すことができるとし、ウォロフ語を実例として、数学、物理学等の用語をウォロフ語の内的論理にしたがって翻訳し、さらにいかなる論理、表現も翻訳可能であることを示すために、アインシュタインの相対性理論やギリシャ古典文学、現代ヨーロッパ文学のテキストをウォロフ語に翻訳して見せたのである。

しかもディオップは孤立した先駆者ではなかった。ほぼ同じ頃、彼とは別に「国語」の発展を志す

若者たちがいたのである。植民地支配からの自立を主張する「在仏アフリカ人学生連盟（FEANF)」のセネガル人学生たちである。その中心となったのは当時グルノーブル大学に学んでいたシェク・アリウ・ンダオ、アッサヌ、シラらだった。彼らはラテン文字によるウォロフ語の文字表記システムを独自に考案し、それをテキストとして出版して[7]在仏のセネガル人学生に向けた働きかけを行うとともに、演劇、詩作を通じてウォロフ語復権の運動を行っていたのである。彼らの運動はフランス国内のセネガル人学生の間に限られた小規模なものに過ぎなかったが、セネガルの他の言語に先駆けてラテン文字による表記システムが作られ、実際にそのシステムによるウォロフ語の文字言語としての使用が行われ始めたことは、シェク・アンタ・ディオップの著作に匹敵する重要性を持った。この運動にかかわった学生たちが、アラビア文字によるウォロフ語イスラム文字の伝統とは別に、ウォロフ語の新たな文字言語としての使用伝統を作っていったのである。ンダオは後にフランス語作家として知られることになるが、ウォロフ語での出版が不可能であったためにやむを得ずフランス語を作品発表のための言語として選んだのだ、と後に語っている[8]。シラは、ウォロフ哲学の研究を続ける傍ら、イスラム詩人のアラビア文字で書かれたウォロフ語作品のラテン文字への転記、フランス詩のウォロフ語への翻訳などを行い、現在も19世紀以来のウォロフ語文学作品の撰文集を刊行し続けている[9]。

独立後の60年代から70年代になると、彼らに続くフランス語知識人たちが次々と現れてきた[10]。その中で特に注目されるのが作家センベーヌ・ウスマンとこうした「国語」ナショナリストたちによって70年代に展開された『カッドゥ』の運動である。冒頭に引用した『ハラ』の一節は、センベーヌが言語学者のパテ・ディアニュらと展開した実在の運動のことを語っていたのだ。ウォロフ語雑誌『カッドゥ』（ウォロフ語で「言葉」の意味）は1971年から5年間にわたって月刊で発行された。『カッドゥ』は文学、社会問題、科学などの広い分野にわたってウォロフ語の記事を掲載し、毎号フランス語の用語のウォロフ語訳語を示していた。タイプ原稿を謄写版印刷しただけのわずか30ページ程度のこの雑誌には、研究者などの知識人たちだけでなく学生を中心とした多くの若い世代の人々が参加し、フランス語で教育を受けた人々にウォロフ語の潜在力を教えることとなった。この運動は、当時の大統領サンゴールの徹底した親仏姿勢を新植民地主義的従属として批判する政治運動としての色彩を色濃く帯びていたが、言い換えれば、言語問題はサンゴールの対フランス従属姿勢を批判する知識人にとって、セネガル・ナショナリズムの象徴的な核となっていたのである。

『カッドゥ』は資金難などのために発行を停止したが、こうしてひとつの政治的主張となった言語ナショナリズムは、1974年、三党のみに制限されていたとはいえ、サンゴールが複数政党制を認めたことで、新しく登場した野党のスローガンとして取り込まれていった。最初に政党としての登録を認められたリベラル野党「セネガル民主党（PDS)」も76年に登録を認められたマルクス主義政党「アフリカ独立党（PAI)」も、ともに「国語」の教育と行政への導入をうたい、政党としての登録は拒否されたとはいえ76年にシェク・アンタ・ディオップが自ら結成した「国民民主連合（RND)」は「国語」ナショナリズムをその主張の中核に据えていた。81年に政党結成が完全に自由化されて以降は、ほとんどすべての野党が「国語」の導入をそのスローガンのひとつとしている。また政治的にも無視できない重みを持つ教員組合も、すべての団体が「国語」の教育への導入を緊急の課題として掲げている。

この「国語」ナショナリズムは、一貫して対フランス語言語ナショナリズムとして主張されてきた。すなわち、「外国語」であるフランス語のみが公用語であり公教育の言語であることを批判し、アフリカの言語にこそそのような地位を与え、文字言語として発展させるべきだとする主張である。主張される構図は「アフリカ語」対「フランス語」という構図であり、「アフリカ語」の十把ひとからげの否定に対してその復権が主張される限りにおいて、この言語ナショナリズムはすべてのアフリカ語の名において語っていた。

しかし現実に全面に押し出されたのはウォロフ語ナショナリズムだった。確かに60年代半ば以降、「フルフルデ語再生協会（ARP）」をはじめとするフルフルデ語ナショナリストたちも同様の対フランス語言語ナショナリズムを唱え、フルフルデ語の文字言語としての発展を目指してきたが、その広がりと蓄積はつい最近にいたるまでわずかなものに過ぎなかった。そして、対フランス語言語ナショナリズムの中核を担ってきたウォロフ語ナショナリストたちにとっては、フルフルデ語を筆頭とする他言語の存在は、無視し得ないものであるとしても、最近になるまでは、むしろ副次的問題にすぎなかったのである。

3．セネガル政府の言語政策

それでは、こうした言語状況のなかで、そして言語ナショナリストたちの「国語」導入の主張を前にして、セネガル政府はどのような言語政策をとってきたのだろうか。私は、独立以来現在にいたるまでを大きく分けて三つの時期に区分できると考えている。以下、各時期について見ながら、政府の言語政策がどのように変遷してきたかを辿ってみよう。

(1)第一期：フランス語化政策と「国語」についての象徴的身ぶり

60年の独立から81年1月のサンゴールの大統領職辞任までの20年間を特徴づけるのは、文人大統領サンゴールの「対英語」フランス語ナショナリズムである。

確かにサンゴールは、後に自らの政策を弁護して述べているように[11]、「原則」としてはフランス語とアフリカ諸語の併存を唱えており、教育へのアフリカ諸語の導入も「原則」としては政策目標としていた。1971年には当時認知されていたセネガル国内の23言語の内6言語を「国語」として指定してその表記法を政令で定め、72年にはこれら6「国語」の公教育への導入を「原則」として定めている。また79年からは初等教育段階でウォロフ語、フルフルデ語、セレール語、ジョラ語の実験クラスを数クラス設置し、80年からはフランス政府の技術、資金援助を受けてウォロフ語のテレビ実験クラスを実施している。しかしこれらはすべて、ほとんど実態をともなわない象徴的身ぶりにとどまった。サンゴールの唱えた「原則」は、「国語」ナショナリストたちの批判をかわすための「アリバイ」的原則にすぎなかったと言っても過言ではない。

「国語」ナショナリストたちの批判に対してサンゴールが好んで繰り返した答えは「始めから始めなければならない」というものだった[12]。確かに、表記法、標準語文法、教科書の準備、教師の養成など、不可欠の準備を欠いたまま「国語」の導入を実施した隣国ギニアの無惨な失敗を考えれば、正式の「国語」導入までに十分な準備が必要だというサンゴールの立場は一見正当化しえるように思える。しかし、現実には「準備」のための予算措置をともなった具体的政策は事実上存在せず、「原則」は結局空文のままであった。71年の政令はアルファベットを定めただけのものであり、次の段階にあ

たる「正書法と語の分割に関する政令」は、75年にウォロフ語とセレール語の二「国語」について、80年になってフルフルデ語について定められただけで、他の三「国語」については現在も定められていない。標準文法、教科書の作成、教師の養成などについてもおざなりなままだった。79年からの「実験クラス」についても、そもそもほとんど何の準備もないままに突然実施されたものであり、教科書もなく、フランス語による授業しか経験のない教師によって行われた「実験」が、まもなく失敗に終わったのは当然の結果だった。

サンゴールが実際に力を注ぎ、具体的施策として実行したのは、国内に対してはフランス語を唯一の公用語、唯一の教育言語とする徹底したフランス語化政策であり、対外的には英語圏諸国に対抗する「フランコフォニー（フランス語圏）」の結束強化のための働きかけである。フランス大統領を中心に据えて毎年開催される「フランス語圏アフリカサミット」についてここで詳述するゆとりはないが、サンゴールが「フランコフォニー」の形成に最も熱心な大統領であったことは指摘しておくべきだろう。言語ナショナリズムを特徴づけるもののひとつとして言語純血主義、すなわち外国語の用語や用法が自らの言語内に浸透するのを阻止しようとする姿勢があるが、サンゴールはそうした意味でも徹底したフランス語ナショナリストであった。サンゴールは73年から75年にかけて、個人名、地名の表記についてフランス語正書法に基づく表記法を政令として定め、従来行われてきた「誤った」表記法を禁じただけでなく、「フランス語豊富化の政令」を定め、英語の術語が最も浸透している最新の科学技術用語のフランス語用語集を、わざわざ科学者、言語学者を総動員して作らせているのである。『カッドゥ』に集まった「国語」ナショナリストたちがウォロフ語の術語を作りだそうとしていたとき、サンゴールが国家の施策として行っていたのは「フランコフォニー」のためにフランス語術語を作り出すことであった。

(2)第二期：フランス語普及の限界の認識と「国語」導入の建て前の成立

81年のアブドゥ・ジュフの大統領就任は、断絶を生み出したわけではないとしても、ひとつの変化をもたらすものであった。少なくとも教育、行政への「国語」の正式導入が公に議論され、その方法と形態が具体的に討議される課題となったのである。

アブドゥ・ジュフは就任とともに重要な決定を二つ行った。ひとつは政党の完全自由化であり、もうひとつは「教育国民会議（Etats Généraux de l' Education)」の開催である。この「教育国民会議」はサンゴール時代の教育政策、言語政策への批判が噴出する場となった。批判されたのは、独立語20年を経て識字率が20％台にとどまっているフランス語教育システムと、空文のまま放置されている「国語」導入のための具体的施策の不在である。

これを受けてジュフ大統領は「教育改革審議委員会（CNREF)」を設置し、教育政策についての提言をまとめさせた。

84年に出されたその報告[13]は公教育への「国語」の導入を明確にうたうとともに、そのために不可欠のものとして政府の言語政策の根本的転換を要求するものだった。「報告」は、「国語」による教育が有効なものとなるためには、文字言語としての「国語」の知識が社会生活において現実に役に立つものとなることが絶対的な条件であり、そのためには「国語」をセネガルにおける公的生活の公式な言語としなければならないとし、ウォロフ語の「統一国語」としての使用、他の「国語」の地方レベルでの使用を提言したのである。フランス語は「統一国語」ウォロフ語とともに公用語として維持さ

れるが、公教育においては段階的に英語と並ぶ「外国語」としての教育に変えて行くべきだとしている。

ジュフ大統領はこの「報告」を将来に向けての提言として受け入れたが、これも結局「建て前」としての「国語」導入方針の確認にとどまり、具体的な政策は事実上何一つとして実施されなかった。71年の6「国語」制定とともに設置され、有名無実のものとしていったん廃止された国民教育省識字局が84年に再設置され、91年には「識字国語推進庁（Sous-ministére de la promotion des langues nationales et de l' alphabétisation）」に昇格されたが、これも具体的な内実を伴うものではなかった。

しかし、この「建て前」の採択は、これまでフランス語対「国語」という構図で展開されてきた議論の裏面に常に存在していたもうひとつの問題を明るみに出すことになった。ウォロフ語以外の「国語」の地位の問題である。ダカール大学応用言語学研究所（CLAD）のスレイマン・ファイが伝えるひとつのエピソードがそれを象徴的に示している[14]。

セネガル国民会議で使用される言語は言うまでもなく公用語のフランス語だが、なかには学校教育を受けておらずフランス語を十分に話せない議員もいる。恐らく「教育改革審議委員会」の報告が出たころのことだが、こうしたフランス語を十分に話せない議員の一人が大臣に対する質問をある日ウォロフ語で行った。その日はそれは問題とはされなかった。大臣は彼の質問を受けつけ、フランス語で答弁を行った。しばらく後、今度はある野党の議員が…彼はフランス語も完璧に使えた…ウォロフ語で大臣への質問を行った。大臣は・・・自らの母語であるフルフルデ語で答弁をした。この出来事以来、国民会議での議論は、再びすべてフランス語で行われるようになったという。

つまり、このエピソードは、ウォロフ語以外の少数言語の立場が政治問題化する可能性を示唆しているのである。

(3)第三期：外国資金の流入と識字の展開

84年の「報告」が出て以来現在にいたるまで、政府の言語政策については大きな転換は行われていない。「国語」の教育への導入もウォロフ語の「統一国語」化も棚上げされたままである。しかし、90年代に入ってから、政府の言語政策の事実上の不在の中で、新たな状況の展開が始まっている。とくに93年に再び行われた「教育国民会議」以来、その展開は急になっているように思える。

93年にコルダで開かれた「教育国民会議」でも、一向に改善されない識字率の低さ、フランス語のみによる教育システムの問題が指摘され、再び「国語」の公教育への導入が求められた。この時も政府は「建て前」の確認を行うのみで、教育、行政への「国語」導入問題については新しい方向性を示すことはできなかった。ただ成人識字に関する政策については、事態の推移に追随する形ではあるが、大きな方針転換を行っている。

新たに打ち出された「フェール・フェール（「行わせる」）政策」は、成果の乏しかった直接の識字活動から政府が撤退し、政府の役割を国際機関や外国援助の資金の配分と調整に限定し、識字活動の実施を内外のNGOに全面的に委託するというものである。

この方針が打ち出されるとともに93年にまず「識字1000クラスプロジェクト」がカナダ政府の機関である「カナダ国際開発局（ACDI）」の資金援助によって実施され、94年からは「セネガル集中識字プロジェクト（PAIS）」がやはりACDIの資金援助によって二年間の予定で開始された。さらに96年からは、同じく二年間のプロジェクトとして、ACDIの資金援助で「第二次セネガル集中識字プロ

ジェクト（PAIS 2)」および「非公式教育行動計画支援プロジェクト（PAPA)」が、そして世界銀行の資金援助によって女性家族省が実施する「女性優先識字プロジェクト（PAPF)」が開始されている。

実施主体のNGOは、資金潤沢で総合開発計画実施の方法論も整備された外国NGOや、経済開発計画の一環としての識字計画に一定の経験の蓄積を持つ「繊維紡績開発公社（SODEFITEX)」、「セネガル川流域及びデルタ土地改良開発公社（SAED)」などの開発公社から、政府から配分される限られた予算以外に資金を持たず、人材も経験も乏しいまま識字クラスを実施している地元NGOまでさまざまである。そして、こうした実施主体の資金力、人材、経験、方法論の大きな差異がもたらす問題も少なからず存在する。

しかしいずれにせよ、現在進行中の識字計画は少なくとも規模の点では、「国語」による識字プロジェクトとしては、独立以来最大のものである。実施の実態とその影響については現在調査中であり、現時点で計画全体を評価することは困難だが、方法論、教材、識字指導員の養成などについてまだ多くの問題を抱えているとはいえ、文字言語としての使用が甚だしく限定されていたセネガルの「国語」のあり方について、少なくとも従来とは異なった状況が生みだされていく大きな契機となるだろう。

また93年には、カナダ政府の援助によって主要フランス語紙のジャーナリストを対象に「国語」による識字講座が行われ、94年から96年にかけては、ユニセフの資金援助で主要三紙に「国語」紙面がもうけられた。

現時点で言えることは、政府の明確な言語政策は不在のまま、外国資金の流入が、今後のセネガルの「国語」文字文化のあり方を規程する可能性のある新しい現実を形成しつつあるということである。

4．人々の選択

では、政府の識字政策やNGOの働きかけの対象となる人々は、こうした動きにどのように反応しているのだろうか。

さまざまな識字クラスへの人々の参加動機の詳しい調査はまだできていないが、これまでに訪ねたいくつかの識字クラスでのインタビューの結果から言えることは、やはり最大の動機は「ともかく何かの役に立つ」ということである。政府の「女性優先」の方針もあって識字クラスの参加者の大多数が女性だが、教育においても行政においても「公的」な分野で「国語」に何の位置も与えられていない現状のなかで、彼女らが余裕のない生活時間の一部（通常週３日２時間づつ）を割いて識字クラスに参加し続けるためには、当然具体的な動機づけが必要である。そしてそれは、当然のことながら言語ナショナリストたちの思いとは大きな隔たりがある。

生活向上のための経済活動、保健衛生、共同体の自治運営という目標のなかに識字活動を位置づける外国NGOや政府開発公社などの場合には、そうした識字の意義はかなり明確な形で共有されているようである。たとえばチエスに本拠を置く米国系NGO「トスタン（TOSTAN)」が識字クラスを組織しているサーム・ンジャーイ村の場合は、外国NGOの働きかけと村人のイニシアチブがほぼ理想的な形で出会ったケースである。

「トスタン」の前身がこの村で活動を始めたのは89年のことだが、それ以前に別の外国NGOの識

字クラスが開かれたことがあった。最初の段階は、読み書きを覚えた女性たちが、とくに子どもたちの健康維持のために村に保健施設をつくろうとしたことだった。一人の女性が、たまたま住所を教えられたイギリス大使館に、覚えた文字を使ってウォロフ語で支援を要請する手紙を書き、それが受け入れられて小さな保健所として使える建物といくらかの医薬品が送られた。そうした彼女らのイニシアチブが「トスタン」と出合い、次の段階では農産物の販売管理、衛生維持のための共同作業の組織と記録、そして子どもを中心とした村人たちの健康管理がウォロフ語の文字知識を用いて行われるようになった。さらには米国NGO支援を受けて水道がひかれるなど、外国援助が村の生活向上に巧みに生かされているのである。昨年（96年）には彼女らのウォロフ語の詩がひとつの詩集となって出版されさえしている[15]。

しかし、こうした理想的なケースはまだ例外的である。多くの識字クラスは、教材もなく、一応の養成を受けた指導員が派遣されるだけの基礎的な「読み書き算盤」のクラスに過ぎない。そうした場合、人々はなぜ識字クラスに参加するのだろう。セネガル南部の町ジガンショールで訪ねたいくつかの識字クラスの場合、印象的だったのは受講者を組織する各地区の女性自助グループのしたたかなイニシアチブである。

スクパパイ地区で訪ねたジョラ語識字クラスは、西アフリカ各地で総合開発プロジェクトを行っているADEF-AFRIQUEが指導員を派遣するクラスだが、ここで行われているのはもっとも基礎的な「読み書き算盤」クラスにすぎず、受講者には石版とチョークがあるだけで教材も配布されていなかった。しかし、聞いてみると彼女らの識字クラス参加は、グループとしての活動計画の一環として明確な位置づけを与えられているものだった。識字クラスは週三日開かれるが、彼女らは週四日集まり、一日は参加者が分担金を支払って染色の講師を雇い、セネガルの観光みやげとしても知られているバティック染めの技術習得のために当てている。つまり彼女らはグループとしてバティック染めの製造と販売を行うために、最低限の計算と記録の方途を得ようとしているのである。

別のあるグループはジョラ語のクラスを二年間受講した後、今度はフランス文化センターの提供するフランス語識字クラスを受講している。フランスの政府資金で行われるこのクラスは教材、ノート、筆記用具まで提供されるクラスであり、公用語のフランス語を少しでも読み書きできた方が有利であると言う判断に加えて、決して安くないノートや筆記用具を手に入れることは自分たちの活動にとっても十分有益なことなのである。

しかし、資金力のない地元NGOの組織者に訪ねると、このような積極的な動機が存在する場合は必ずしも多くはなく、ただNGOの呼びかけに応じて人々が集まるだけのクラスなどでは参加者の継続率が低く、ときにはクラス自体が消滅するケースもあるという[16]。

政府も識字プロジェクトを実施するNGOも、文字の知識を維持し有効に活用し得るようにするために「識字後」プロジェクトの重要性をはっきりと認識しているし、そのためのさまざまな試みが「識字」の枠組みの中で行われている。そして、教育と行政から「国語」が排除されている限り、その有効性が限定されたものにとどまるであろうこともほとんどすべての関係者に認識されている。

「国語」の知識が「役に立つ」ものになるかどうか、それが問題なのである。

5．結びに代えて

サーム・ンジャーイ村は全員がウォロフ語単一言語話者だが、ジガンショールの場合は、セネガルの都市部で見られる多言語共存の典型的なケースである。ほとんどすべての人がフランス語以外に少なくとも二言語から三言語を常時使用しており、ウォロフ語はすでにジョラ語話者が多数を占めるこの町でも共通語としての地位を得ている。当然、自らの母語ではないウォロフ語の識字クラスが開かれる地区もある。スクパパイ地区のジョラ語識字クラスでも、染色の授業で用いられている言葉はウォロフ語である。染色のための技術用語はしたがってウォロフ語で記憶される。有用性から見た言語選択には母語ナショナリズムの影はあまり見られないのである。

しかし、政策的に「国語」間の地位序列が定められた場合、果たして人々の反応が同様に融通無碍なものであるかどうかはわからない。

植民地支配から独立を獲得した多言語国家で、土着言語のひとつを単一の「国家語」として選び、それを教育、行政のほぼすべての分野に定着させ得た事例はそれほど多くない。しかも植民地期からの歴史的経緯や言語、社会状況の違いがそれぞれの事例の背景で普遍化を阻んでいる。アフリカ大陸ではタンザニアが、アフリカ語を「国家語」として定着させることに成功したと言える唯一の事例だろう。セネガルのウォロフ語ナショナリストたちはしばしばタンザニアの例を引くが、やはり多くの点でセネガルとは事情があまりにも違う。まず第一にタンザニアでは、一貫してフランス語のみが公用語であり教育言語であったセネガルの場合と異なり、ドイツの植民地支配の時代からスワヒリ語が植民地支配の行政言語として使用され、イギリス支配の時代にはすでに小学校の教育用語として用いられていた。さらに言語系統の異なる言語が併存するセネガルの場合と違い、タンザニアの住民の95％はスワヒリ語と同じバンツー語族の言語であった。しかもスワヒリ語の「国家語」としての採用とその普及のための努力は、独立直後のナショナリズム・イデオロギーの高揚期に一気に行われている。インドネシアにおけるインドネシア語の場合も、日本占領期の政策と独立後の開発独裁の歴史を無視しては現在のインドネシア語の定着を説明することはできない。

他方、多言語主義を採用した国々で現在も矛盾を抱え続けていない国はない。多数派のヒンドゥ・ナショナリズムが他の言語グループとの巨大な軋轢を生み出しているインドは、その典型的な例である。新生南アフリカは11の言語を平等の公用語とするという決定を下したが、現実にどのような運営が可能かは、すべてこれからの課題として残っている。

民主的なプロセスを経て「国語」ナショナリズムと母語主義、そして「近代化」、「発展」の問題に普遍化し得る「解決」の方向が示された例は残念ながら存在しない。むしろそれは現代の世界が直面する問題そのものである。

セネガル政府の長期にわたる躊躇の背景には、具体的な選択が引き起こす軋轢を回避しようとする政治判断が明らかに働いている。しかし、政府が選択を回避し続ける間も、人々のさまざまな選択は続けられ、新たな状況が形作られていく。

多言語社会のなかではどのような課題が存在し、どのような文化戦略が可能なのか、セネガルの人々の選択を注視しながらさらに探っていきたい。

【註】

(1) Sembène Ousmane, *Le Mandat*, Présence Africaine.

(2) Sembène Ousmane, *Xala*, 1973, Présence Africaine, p. 142.

(3) グギ・ワ・ジオンゴ、『精神の非植民地化』、宮本正興、楠瀬佳子訳、1987、第三書館.

(4) SIL, *Sénégal, Internet, WWW@sil. org, 1996.*

(5) Cheikh Anta Diop, *Nations nègres et Culture*, 1954, Présence Africaine.

(6) この立場は現在テオフィル・オベンガによって引き継がれている。cf. Théophile Obénga, *Les Bantus*, 1985, Présence Africaine.

(7) *IJIIB WOLOF*, 1959, FEANF.

(8) 87年7月に筆者が行ったインタビューでの発言。実際1990年に出版された彼の最初のウォロフ語詩集*Lolli, Taataan* (1990, IFAN, Dakar)には50年代からの作品が収録されている。また、1972年にフランス語で出版された小説『ブール・ティレーン－メディナの王』(Cheikh Aliou Ndao, *Buur Tileen-Roi de la Médina*, 1972, Présence Africaine.) は、93年にウォロフ語版が出版された(*Buur Tileen,* 1993, IFAN-ACCT)

(9) Assane Sylla, *POEMES ET PENSEES PHILOSOPHIQUES WOLOF*, 1986, ACCT-IFAN.

(10) 言語学ではパテ・ディアニュが現代ウォロフ語文法を出版し (Pathé Diagne, *Grammaire du wolof moderne*, 1971, Présence Africaine)、イスラム学ではアマル・サンブがセネガル人イスラム詩人の研究を行って、アッサヌ・シラとともにウォロフ語文化の過去の遺産を現代に甦らせようとした (Amar Samb, *Essai sur la contribution du Sénégal à la littérature d'expression arabe*, 1972, IFAN.)。そうした仕事は現IFAN教授アラム・ファルによって継続されているだけでなく、バシルー・ジェエンによる口承文学の転記と研究 (Bassirou Dieng, *Epopée du Kayor*, 1993, CAEC.) をはじめとして、ウォロフ語文化の研究と文字化は幅広い分野で行われている。

(11) L. S. Senghor, "Préface" in Pierre Dumont, *Le français et les langues africaines au Sénégal*, 1983, ACCT-KARTHALA.

(12) ibid.

(13) CNREF, *Rapport général,* 1984, CNREF.

(14) Souleymane Faye, "Les langues du Sénégal", in *REALITES AFRICAINES & LANGUE FRANÇAISE* No. 21, 1987, CLAD, p. 11.

(15) *XOL YU FEES*, 1996, PENC-OXFAM AMERIG-TOSTAN.

(16) ビニョナ市の「ジョラ文化再生協会 (ARCJ)」支部の談話 (97年3月)。ジガンショール市視学局でも同様の指摘があった。

【主要参考文献】

Association des Chercheurs Sénégalais, *L' Impact des journaux en langues nationales sur les populations sénégalaises*, 1990, ACS.

CALVET, Louis-Jean, *Les langues véhiculaires,* 〈Que sais-je?〉 no. 1916, 1981, PUF. (邦訳、＜文庫クセジュ＞『超民族語』、林正寛訳、1996、白水社)

—(Éd.)、*Les langues des marchés en Afrique*, 1992, Institut d' Études Créoles et Francophones.

—*Les voix de la ville*, 1994, Payot & Rivages.

CARAVANE DE L' ALPHABÉTISATION AU SÉNÉGAL, *Les Publications en Langues Nationales au Sénégal : Étude du marché,* 1996, CARAVANE DE L' ALPHABÉTISATION AU SÉNÉGAL.

CHAUDENSON, Robert (Éd.), *La francophonie: représentation, réalites, perpectives*, 1991, Institut d' Études Créoles et Francophones.

CLEF, *Littérature Sénégalaise,* 〈Notre librairie〉 No. 81, rééd. 1989, CLEF-ACCT.

CONFEMEN, *PROMOTION ET INTÉGRATION DES LANGUES NATIONALES DANS LES SYSTÉMES ÉDUCATIVES*, 1986, Librairie Honoré Champion.

COULMAS, Florian, SPRACHE UND STAAT - Studien zur Sprachplanung und Sprachpolotik, 1985, Walter de Gruyter & Co.（邦訳、『国家と言語—言語計画ならびに言語政策の研究』、山下公子訳、1987、岩波書店）

Direction de l' Alphabétisation et de l' Éducation de Base, *Bilan de l' Alphabétisation et de l' Éducation de Base*, 1996, Ministère sénégalais de l ' Éducation Nationale.

DIOUF, Makhatar, *SÉNÉGAL, LES ETHNIES ET LA NATION*, 1994, L' HARMATTAN.

DREYFUS, Martine, "Enfants et plurilinguisme" , *in Réalités africaines et langue française*, No. 21, 1987, CLAD.

DUMONT, Pierre, *Le français et les langues africaines au Sénégal*, 1983, ACCT-KARTHALA.

FAYE, Souleymane, "Les langues du Sénégal", in *Réalités africaines et langue française*, No. 21, 1987, CLAD.

HEREDIA-DEPREZ, Christine de, "Aquisition des langues en situation plurilingue", in *Réalités africaines et langue française,* Numéro Spécial, 1988, CLAD.

—, "Attitudes, sentiments linguistiques, comportements langagers", in *Réalités africaines et langue française,* ibid.

JUILLARD, Caroline, *SOCIOLINGUISTIQUE URBAINE*, 1995, CNRS Ed.

KAZADI, Ntole, *L' Afrique afro-francophone*, 1991, Institut d' Etudes Créoles et Francophones.

PRINZ, Manfred, *L' ALPHABÉTISATION AU SÉNÉGAL*. 1996, L' HARMATTAN.

SUNANO, Yukitoshi, "Une volonté de réhabilitation d' une littérature en langue africaine - sur la littérature wolof du Sénégal", in *The Journal of Kumamoto Women' s University*, Vol. 45, 1, 1993, Kumamoto Women' s University

田中克彦、『言語の思想—民族と国家のことば』、1975、日本放送出版会.

—『ことばと国家』、1981、岩波書店.

—『言語から見た民族と国家』、1991、岩波書店.

TOSTAN, *L' éclosion*, 1995, UESCO.